

JTU-HYOGO
兵庫高等学校教職員組合
日本教職員組合(日教組)

兵高教新聞

裏面 ◇第32次教育研究集会
分科会の概要

神戸市中央区中山手通 4-10-5 神戸市教育会館内 TEL078-261-0829 FAX078-261-1094 E-mail:hyokokyo@pearl.ocn.ne.jp

発行人：西村恭介 編集：兵高教書記局

兵高教第32次教育研究集会開催

= 「民主社会を支える教育」～多様性が尊重される学校と社会を～ =

10月16日(土)、神戸市教育会館において、兵高教第32次教育研究集会を開催しました。県下各地から多数の参加者を集め、午前中の全体会、午後の分科会を通じて、活発な討議・意見交流が行われました。

冒頭、西村恭介執行委員長はいささつの中で「新型コロナウイルス感染症拡大の影響が長期化する中、子どもたちはつらく厳しい日々を送り大きなストレスを抱えている。子どもたちを支え、奮闘されている教職員のみなさんのご苦勞も計り知れない。あらためて感謝の言葉を述べたい。教研活動は教職員組合の運動の柱であり、日々の実践を持ち寄り、協議し、学びを深める貴重な場である。記念講演・分科会での学びを通して得たものを持ち帰り、明日からの教育実践に活かしていただきたい」と呼びかけました。



主催者あいさつ

■記念講演

「私」からはじめ「私たち」の多様性社会
三木幸美さん(とよなか国際交流協会)
フィリピンと日本の「ハーフ」として大阪の被差別部落で生まれ、無国籍・無国籍児から8歳で「日本人」となった三木幸美さんが、マイノリティ当事者として「自身」『私』のこれまでの体験をふまえ、「どうすれば『私たち』が暮らしやすい社会になるか」について、さまざまな角度から語っていただきました。

講演の概要を簡単に紹介します。
・地域で生活している外国人は、「法律・制度の壁」・「言葉の壁」・「心の壁」の「三つの壁」に阻まれ生き辛さを抱えている。
・コロナ禍の下で、マイノリティに向けるまなざしが厳しくなると感じる。不安な気持ちだが、さらに弱い立場に攻撃の矛先を向けさせる。
・ネット上での「部落」の語られ方が、非常に悪質なものになっている。「差別」を「する」「される」ハードルが下がっている。これからは「自分が差別をしないためにどうするか」も考えなければならぬ。
・生まれ育った地域には、「自分とは違った人がたくさんいる」ことを学べる環境があった。地域をよくするために、そぐわない人を追

出すことは絶対にしなかった。今いる人でこの地域を強く豊かにしていく、そのためには今いる人がどういう人なのか、理解が必要。「いじめられている子が転校する」「虐待を受けている子がシェルターに入る」「外国にルーツがあることを隠し、同化を強いられる」など、社会の中で不利益を被る人がさらに変化を求められるということがたくさんある。しかし、自分が育ってきた地域の学校では、「不利益・差別を解消しなければならぬ」という方向に向かせてくれた。

・中学校3年生の時、母親と口論になり「うるさい、ちゃんと日本語喋れるようになって出直してきて!」と口にしてしまった。母親は泣きながら「あなたのママが私やなかったら、あんたもつと幸せやったのに、ごめん」と言った。すぐに謝ったが、謝って終わったということではない。差別を受けた私が、差別をしてしまう。今も、これからも起こりうることであり、そういう子ども、親をつくって欲しくない。
・社会における自己責任論は、行き過ぎると「孤立」につながる。ひとりではがらばり、自分を奮い立たせなければならぬ社会ではなく、周りで応援しているだけの人がとにもがらばり、壁に穴を開けたり、壁を動かしたりすることはできないのだろうか。

・中学生時代の人権討論集会で、自分の話をすることの大切さを学んだ。個人的な問題を取り出して社会的なものとして位置づける、そのことで、聴く側が感じ、考え、差別する側・される側に二分化されるものではないことに気づく。差別の場に居合わせることもあり、その時にどうするか、が試される。「差別はなかったのではない、自分に見えていないだけだった」という発言が大変印象に残っている。
・差別はふとした時に現れる「意識」、そこに善意/悪意は関係ない。「寝た子を起すな」ではなく、閉じ込める言葉に抗いながら「誰も寝かせない」ことが必要。デマやヘイトスピーチに打ち勝つためには、私たちが「起きて」目を光らせることが最も大切。

・とよなか国際交流協会では、外国人のライフステージに沿った多様な支援を行っている。支援をブツ切りにしない、人生をみれる事業を運営している。特徴的な事業として、日本語教室ではなく、日本語交流活動を実施。日本語教師の資格を持たない地域のボランティアが横のつながりとして外国人市民と出会う。ライフラインとしてのつながりをつくる。ボランティア養成講座ではテクニク的なことは一切行わず、全て人権に関わる内容で実施している。

・マイノリティの子どもたちが自己決定権を奪われている。自分にとって大事なものを見極める時間や場所をつくり、それを安全に選ぶことができる場所をつくりたい、との思いからダンス教室を始めた。「私はここにいたい」と思えるまで大人が子どもを信じて待ち続けることが必要で、そのために「何やってもいい」をルールに、安全な「場所」をつくっていくことを大事にしている。

・人権を学び、社会の「解像度」をあげること、人権はふるまいを「制限」するものではなく、より良い選択の根になること、「受け入れる」よりも「引き受け考える」姿勢を持つこと。これらが、誰のことばも奪わないために、私たちができることではないか。マイノリティでもマジORITYでも、生き抜く術ではなく生き抜く必要のない社会へ転換していけるのではないだろうか。

※分科会の概要は裏面に掲載



記念講演・三木幸美さん



全体会の様子

兵庫高等学校教職員組合(兵高教)は、《JTU日教組》加盟の組合で、1989年に設立しました。
※「兵庫高教組」「兵高教組」「高教組」(兵庫県高等学校教職員組合)とは、関係ありません。

■分科会報告■

第1分科会「今日の教育課題」

①「給食を生きた教材として活用した食育」

秋田久恵さん・徳田佳子さん

(西播・播磨特別支援分会)

- ・授業で行う農園作業や裏山で収穫した様々な食材を活かした献立作りを行っている。
- ・給食調理員さんのからの提案で、台湾料理やスペイン料理など世界各地の料理も提供している。異文化を知るきっかけ、コミュニケーションのきっかけになれば、という思いで出している。メニューが変わってあればいるほど、ホームルームで話題になつていよう、今後も提供していきたい。
- ・お月見やハロウィン、12月の寄宿舎祭、卒業式など季節ごとのテーマに応じたメニューも用意している。子どもたちの笑顔が嬉しい。様々な特性を持つ子どもたちが、親元を離れて身の回りのことを自分でしながら寮生活をおくっている。一年目は寮生活に慣れず、表情の暗い子どもも、学年が上がるにつれて笑顔が増えてくる。卒業時に生徒の話をお聴くと「この学校に来てよかった」「自分からコミュニケーションがとれるようになった」などの声があり、社会に出る前に良い経験ができていふのだと思う。
- ・調理員として、生徒たちが笑顔で幸せそうに食べてくれたら十分。
- ・食べたことがないから食べない、食べ方がわからないから食べないという子どもたちが、経験することで食べられるようになれば嬉しい。
- ・食生活の乱れは、本人の意識が変わらない限り直しにくい。意識変化のきっかけになれば、ひとつでも何か心に残れば、と思いつつながら食育にとりくんでいる。



分科会の様子

②「高校生が紡ぐ西宮と奄美の友好の糸」

阪本真人さん(阪神・西宮甲山分会)

- ・修学旅行の中でプロジェクト学習型のキャリア教育をすすめている。修学旅行先の奄美市は西宮市と友好都市提携をしている。昨年度初めて「修学旅行プロジェクト成果発表会」を行うとともに、友好都市交流を行ったことで、生徒たちが何を考え、今後さらに交流を進めていくためにどうすべきかを、西宮市長を訪問し提案を行った。
- ・1年生3学期から、修学旅行スタッフを公募し、エントリーシートを提出させ選考を実施。11人の応募者全員をスタッフとして決定し、それぞれ役割分担を決めて準備を始めた。修学旅行新聞を発行したり、西宮市を紹介するために全生徒にアンケートを行ったり、スタッフだけではなく学年の生徒全員に当事者意識を持ってもらうためのとりくみを、生徒主体で行った。
- ・11月の修学旅行での交流会では、スタッフ生徒が当日のスローガンを「天涯比隣」とした。「たとえ遠くにいってもすぐ近くにいるように親しく思われること」の意で、この言葉を見つけてきた生徒たちは、本当に素晴らしいと思った。
- ・修学旅行後の発表会には、西宮市秘書課、企業関係者、甲南大学広報課の方がたを招待し、講評をしてもらい、多くの気づきを得られた。子どもたちそれぞれが、何かしら得たものがある。

③「初めてのクラス担任として」

清家大毅さん(尼崎・尼崎西分会)

- ・子どもたちどうしの人間関係についての問題が、クラスや部活でさまざま生じている。子どもたちの話を聞いていかに聞きとり、保護者とも連携しながら対応を続けている。
- ・クラスの生徒は欠席も少なく、他の教員からも積極的な生徒が多いと言われていたが、アンケートを実施したところ「自己肯定感」「自己有用感」が低めの生徒が多いことがわかった。「学校は楽しいし、学校生活もうまくやっていると」は思うが、自分に自信が持てない」と言う生徒にどう対応したらいいのか、悩ま

しい。

- ・学校全体で職員の協力・協働体制を作っていくことが大事だと思うが、なかなか難しい。
- ◆参加者より
- ・子どもたちについていかに向き合い、心を開き、いつでも話ができる状況をつくって、じっくり関わっていくことが大切ではないか。子どもたち自身、子どもたちどうしで考えさせることも必要。HRでソーシャルスキルトレーニング(SST)を実施したりもしている。

第2分科会「インクルーシブな学校づくり」

①「ベトナム人高校生と私の学び」

棟安信博さん(西播・姫路西分会)

- ・ベトナムで高校の半ばまでを過ごし、来日して中学校3年生に編入したAさんが高校進学をめざすにあたって、日本語講座と一緒に勉強をするようになった。
- ・進学した総合学科の高校では、日本の生徒たちが堂々と意見を述べているが、自分ではできず、戸惑いを感じる。Aさんが学んだベトナムの学校では、自由に意見を発表する場はなかったようだ。一方、友だちとの関係も良好で、部活動もアルバイトもがんばっていた。
- ・入学時にはわからなかった日本史に興味を持つようになった。英語はもともと大変よくでき、英語での受験を考えている。
- ・Aさんと一緒に学ぶ中で「言葉を理解」するには、背景にある歴史や社会への理解が必要であることをあらためて考えた。
- ・学校の授業で、日本語理解が十分でない生徒にとつて、生徒どうしの教え合い・学び合いは有効であると思う。
- ・本来、母語で学習できればいいが、高校入試はたとえ特別枠であっても日本語で行われる。これからどこで生きていくかという点で、習得する言語が決まる。

③「すべての生徒が輝くために」

〜「高等学校における外国につながる生徒支援ハンドブック」をもとに〜

山本紀子さん(県外教事務局)

- ・外国につながる生徒支援を中心しながら、サブタイトルを「すべての生徒が輝くために」とし、インクルーシブな学校づくりのために高校現場で何が必要かを、わかりやすく伝えたいという思いで作成した。
- ・県教委は「外国人児童生徒のための受入れハンドブック」を2020年に作成しているが、主に義務制向け。
- ・県教委・人権教育課の調査によると、2020年5月現在、「日本語指導が必要な外国人生徒」のうち高校生は56人。この数字には、日本国籍をもつ生徒は含まれないと思われる。日本語指導が必要な生徒はもつと多く、高校入学や入学後の学習の困難を抱えている。
- ・教員として、外国につながる生徒の想いに寄り添い、名前や在留資格の把握をし、様々な支援制度を正しく理解することが必要。その上でいかに進路指導が求められる。
- ・誰もがありのまま尊重される教育環境をつくるのは、大人や社会の責任だと考える。

②「高校通級の現状と課題」

船脇吉広さん(丹有・高等特別支援分会)

- ・兵庫県は全国的にみても通級指導対象校が多く、幅広い校種で実施されている。今年3月に県教委がまとめた「通級指導実践事例集」と、元同僚の通級担当者からの聴き取りをもとに報告する。